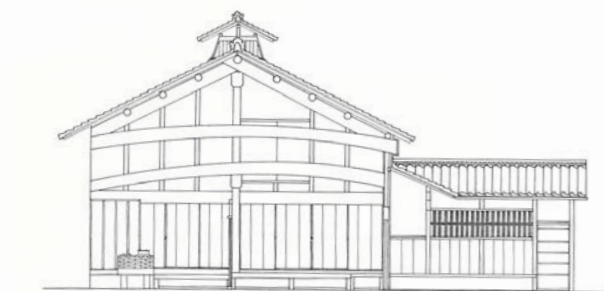


B-B' 断面図

A-A' 断面図



C-C' 断面図

図76 井狩光男家住宅

朝鮮人街道沿いの町なみと比較して、浦街道の町なみは家々との間に畑地が広がり、広々とした印象が強い。長い塀と土蔵・門部屋・薬医門が取り込む屋敷構えは、こうした景観を際立たせる。なお配置図に描かれた平面は昭和63年改築以前のものである。



写真295 くぐり戸付きの薬医門



写真294 井狩光男家住宅外観



井狩光男家住宅 配置図

浦街道の町なみ

朝鮮人街道沿いの町なみ景観は、平入りと妻入りの民家が混在し、かつ密集した民家で構成されている。これに対して、浦街道の町なみ景観は、数こそ少ないものの、広大な敷地に薬医門や長屋門を構え、土蔵や土塀で敷地の周囲を囲う大規模な民家によって特徴づけられる。以下では浦街道の景観でひととき目を引く井狩家の大規模な民家について見てみたい。

井狩光男家住宅写真294・図76

井狩光男家は古くからの大地主であり、庄屋を務め、材木屋や酒屋を営んでいた旧家である。浦街道に面した広大な敷地に屋根付きの腰板塀と板塀が取り囲み、正面にはくぐり戸付きの薬医門を構える(写真295)。門をくぐるとすぐ右に門部屋があり、左には手前から雑蔵・米蔵・主屋が並び、主屋の裏には文庫蔵がある。主屋から南西に延びる渡り廊下の先には隠居部屋がある。敷地内には近江八景を題材とする広い庭があり、外には畑が広がっている。

主屋は切妻造り棧瓦葺き平入りの大規模な民家である。間取りは整形四間取りを基本とし、奥にザシキとブツマの二室をつけたものである。さらにその奥にも二室がつくが、これは後に増築されたものである。ナカノマ・ザシキには長押が巡る。

表の薬医門をくぐり、中門をぬけて中庭に入ると左手に式台が構えられている。村の庄屋などを務める家であり、式台の設置が認められていたのであろう。主屋の手前にはさらに土間とガイドコロ・サバエノ

マが付け足されている。広い土間には、アゲクド・サンボウサンと呼ばれる竈が四口残っている。改築前はシモノオクドサンと呼ばれる竈が四口あり、全部で八口の竈があった。また、シモノオクドサン上の屋根にも煙出しを備えていたが、改築により二つあった煙出しは一つになった。このほか、ゲンカンの上にもツシ二階があり、土間から柴などを投げ入れるための開口部があり、引き違いの板戸が立てられている。

仏間の裏には階段があり、二階は物置に使われている。物置はイマ・ネマ・ブツマの二階部分に設けられている。イマの天井には階段の痕跡が残っており、元は二階への上り下りをここからおこなっていた。物置は登り梁を組み上げ、部屋高を確保している。軸組は折置組で、外壁面には梁が突出している。

主屋の土間の一部が改築されているものの、明治十六年(一八八三)に作製された「江頭村中戸別平面綴」(江頭町自治会区有文書)に描かれた平面図と大差ないことから、明治前期には現在の姿となっていたことがわかる。正確な建築年代は不明であるが、江戸後期のものであると考えられる。

屋根の棟の上には鐘馗が乗っている。一階の庇の上に鐘馗を設置する例は多いが、棟の上は少ない。隣接する寺の鬼瓦に対抗するためのものであろう。

井狩敏博家住宅(写真296・図77)

井狩敏博家は井狩光男家と同様に浦街道沿いであり、街道に面して薬医門・塀・土蔵・門部屋等が並ぶ。街道から主屋を離し、門や塀で囲む屋敷構えは浦街道沿いの景観的特徴の一つとしてあげられる。